

● 14年目後期発表会



←発表会のエンディングにて、クラブ・パッシングを行う生徒たち。

去る7月18日(土)、19日(日)の2日間、発表会が行われた。終演後、ふっと気持ちが和らぐ感覚がからだの中に広がっていた。それは、楽しいショーができていたことと、2011年の東電による福島第一原発事件(事故)による放射能物質による汚染によって、学校を一時休校にせざるをえなかったこと、そしてその後再開したものの、それまで通っていた生徒は現れず、新しい生徒がぽつぽつとしか集まらなかったこと、そして2011年3月以後現在にいたるまで、あれこれ苦労したことが頭を掠めたからだろう。

立ち直ったとはいいいがたいが、なんとかやってきたんだなという感慨と同時に、これからもふらつきながらやっていくんだろうなという気持ちが交差していたようだ。

今回のショーは、卒業生で地元沢入に住んでいる高村篤君の演出で、今回は2回目になる。生徒にジャグラーが多く本人もジャグラーなので、集団のパッシングなどを作ったりして、ショー全体に躍動感が生まれた点もよかった。応援出演してくれた豊田博美さんや卒業生のヨシ&ナナもショー全体に彩りを添えてくれた。次回は、どんな発表会の作品を作ることができるか。ぼくにはそんな興味もわいてきていた。

一方で、現在の生徒数では、学校経営は苦しく、そんななか今日まで何とかやってきたが、これからどうすればやっていけるか、見通しはたっていない。しかしここ数年の苦労に比べれば、それもなんとかなるかもしれないという気がしないでもない。学校を持続させることは、ある意味では、若者に希望

を与えることになるし、また、一見何の関係もないようだが、現在のこの国のありよう、民主主義、憲法を破壊し、アメリカの属国である軍事国家へと、民意を無視して突っ走ろうとする政治家やそこに同調する人々とは異なる生き方を考えていく機会をあたえることになるのではないかと考えている。

サーカス学校を休校にするときに、一部の村民からは風評被害を煽ると非難された。現実に放射能に汚染されている、その数値を明らかにして、その対策として学校の校庭や周囲の除染を市に要請する、その除染が行われるまで休校にすることが、風嬢被害を煽ると言われても、はいそうですかというわけにはいかなかった。現在のフクシマの現状、たとえば、こどもの甲状腺がんやその疑いがあるこどもがあきらかに増えている問題、中間貯蔵施設の問題など、さまざまな問題が事実を事実として公表しないこと、あるいは公表しにくい環境がつくられていることにその深い根があるのだが、ぼくらがサーカス学校を一時的にしろ休校せず続けていたら、結果として、汚染された事実を正確に伝えないことになっていたと思うのだ。正確に伝えることで、生徒たちは地元に戻り、今は新しく入学した生徒たちによるサーカス学校の活動がおこなわれていることに、ぼくらの選択は間違っていなかったと思えるし、それが、現在の問題をなんとか解決していこうというエネルギーになっているのではないか。(西田敬一)

● 沢入国際サーカス学校、次学期始業日は9月7日（月）です

尚、発表会は12月12日（土）と13日（日）に行う予定です。

● 4年目のサーカスバザール



今年も埼玉県富士見市市民文化会館キラリ☆ふじみで開催されたサーカスバザールに多くのサーカス学校生徒、卒業生が参加した。この催しは今年が4回目で、毎回、サーカス学校の生徒、卒業生が多数参加しているが、実は、今年4月に、この会館の道路一本を挟んだところに、巨大なショッピングモールららぽーとが出現し、例年来てくださっているサーカスバザールのお客がすいとられてしまうの

ではないかという不安があり、4回目の企画会議の段階から、関係者一同、戦々恐々の思いであった。

さて、その結果だが、来館者数は、好評だった昨年を上回る数字がカウントされ、ほっと胸をなでおろしたのだが、ホールで行われた有料のサーカスショーは動員数がへり、こちらはなぜだということになってしまった。可処分所得というわけではないが、あるいはお金はららぼーとでのショッピングに落としてしまい、サーカスショーという文化にはお金が回らなかったというのは穿ちすぎる見方か。昨年の目玉が綱渡りでお客の目を引きやすかったのに比べ、今年はロックダンスという、必ずしもファミリー向けではない演目だったことが集客に影響したのかもしれない。

だが、実は、このヒルティ&ボッシュのロックダンスが一番の評判を獲得したのは、なんとも皮肉なことであった。

今回は、ムンドノーボぼこブヨ〜ダン、大道芸の三雲いおりさん、パントマイムのシルヴプレが、パレード、水上ステージやウォーキングで活躍してくれた。

さて、サーカス学校生では、水上ステージで高村篤&ヒロキ、ダイチ&ケント&ジュニアの2組。劇場のサーカスショーには、ナオキとカズ、そして卒業生は、サクノキ、ヨシ、ケンタ、アビマノーラ、ナナ&キヨノカ。ここに、ヒルティ&ボッシュ、そして生バンドとしてブラック・エレファントというメンバーが参加。サーカスショーの構成演出は辻卓也氏で、見事に全体をまとめてくれた。

このほかに、会場のあちこちに木村元・洋子さんの創作物があふれ、ダンボールワークショップでは尾田尚嗣氏が終日、大活躍してくれた。さらにサーカス学校のジャグリングワークショップと、とにかく盛りだくさんの2日間であった。で、今から来年の企画にアイデアを絞り出さなくてはならない。

(西田敬一)



↑ (左) パレードや舞台および会場内の装飾など今年も大活躍くださったぼこブヨ〜ダンの元さん

(右) ダンボールワークショップ部屋内はたくさんの人で溢れ、子どもたちは落書きしたり紙を貼ったりしていました

●京本千恵美パントマイム秩父公演

7月4、5日に、埼玉県秩父郡横瀬町にある、天シアターやまんねという小さな劇場で、京本千恵美の『ここはどっちへ?』の公演が行われた。この公演は、地元のイベント会社に勤務する磯田恵美さんがプロデュースしてくれたものだが、たとえば以前行った静岡などでは、地元で大道芸やパントマイムなどを行っている人などがかなりいるので、ある程度の集客は見込めるだろうが、秩父にはそういう人がほとんどいないとのことなので、いささか心配であったが、50人以上のお客が来てくれ、ほっとした。磯田女史の頑張りであったが、彼女はもっと集客できると思っていたようだった。



そして、公演は大成功。なんと、7割近くのお客がアンケートを書いてくださり、そこにはお褒めの言葉がずらりと並んでいた。磯田女史のメールには、「こういう瞬間に出会いたくて、これまで演劇に関心を持ち続けてきたのかと気付かされるほどでした」とまで書いてあった。これにはこちらが恐縮してしまったが、そうした感想を頂ける作品をお届けできたのはぼくらにしてもありがたいことで、この作品は機会があれば今後も上演していきたいと考えている。次回作を期待するお声もいただいているが、さて、こちらはいつになることやら。アイデアがないわけではないが、まだ、文字をひねり出すところにはたどり着いていないので。(西田敬一)

●出版物二点



『サーカス学誕生』大島幹雄著 せりか書房 2015年6月5日発行 2400円+税

さまざまなジャンルに登場するサーカスを取りあげ、より広い文化空間のなかでサーカスを評価。著者は、それを<サーカス学>として構築しようと試みている。



写真集『伝説の大道芸人 ギリヤーク尼ヶ崎への手紙 大道芸と祈りの踊り』

紀あさ(手回しオルガン大道芸人/写真家) 2015年8月18日発行 2000円+日進堂

大道芸人の大先達(あえて、神様とは言わない)にほれ込んだ、写真家である著者が出版。大道芸人ギリヤークに対する畏敬と愛にあふれた写真と文字。

●ケベックレポート

沢入国際サーカス学校を卒業してケベックサーカス学校(カナダ)に留学していた目黒有沙さん(コントーション、空中リングなど)が、全過程を修了し、無事に卒業しましたので、卒業にあたって記事を書いていただきました。

6月7日に、4夜続いた年度末のショーが幕を閉じ、それとともに私のケベックサーカス学校での学生生活は終わり、プロとして路を歩み始めました。

まず初めの関門はNEWCOMERSHOW。これはドイツ、ライプチヒにあるクリスタルパラスという場所で行われるフェスティバル、もといコンペティションで、ショー受賞者にはドイツ国内の劇場での契約保障が与えられます。このフェスティバルにはドイツ国内だけでなく周辺の国々からもキャストイ

ングに携わっている人々が訪れるので、言わばヨーロッパ市場に入るための登竜門といったところでしょうか。

6月30日午後にライブチヒの空港に到着し、迎えに来てくれた劇場スタッフに連れられてまずは劇場へ。街中にあるその劇場は入り口こそ派手ではありませんが地下に厨房、一階にレストラン・劇場・バー、2階に控え室、その上は劇場のオフィスと出演するアーティスト達が泊まる寮となっています。

ですが、この寮には全アーティストが入れるわけではありません。部屋数がアーティストに対して不足しているからです。部屋はライブチヒに到着した順で埋まっていき遅く到着した数人が劇場外に宿泊することになります。勿論それらも劇場側が借りているものなのですが、場所がなにしろ遠い…。歩いて30分の距離なのです。そして私は今回一番最後に到着した演者なのでした。



↑ (左) カナダの観客の前でパフォーマンスを披露する学生時代の目黒さん ©Norbi Whitney - Videographer / Photographer

(右) ニューカマーショー授賞式にて ©Newcomershow des Krystallpalast Varieté Leipzig

私とほか数人のアーティストが泊まったのはペンションライブチヒという場所でキッチン、お風呂、トイレは共同、食事は劇場で日に3回出るので、食べたければ30分かけて劇場まで歩く、もしくは近くにスーパーがあるのでそこで食材を自費で買ってペンションのキッチンで調理する、ということになります。私の隣の部屋だったミュート（タイ出身のパントマイムデュオ）のお一人はパンやスパゲッティといった洋食が苦手らしくキッチンで自分で料理をしていました。

食事はビュッフェ形式で振舞われ、とても美味しかったです。残念だったのはペンションから劇場までの距離と気温（連日35度を超えていました）、待機時間（何回も往復したくない、照明関係が終わってしまうとやることがない）のせいで已む無く朝食を諦めざるを得なかったことです。

30分かけて歩く間に見える街中には、いたるところに教会があり、お昼など決まった時刻になると鐘の音が街中に響き渡っていました。路には路面電車が通っていて建物はケベックでも見慣れたレンガ造りでしたが、比べてみるとやたら四角かったような気がします。平日にはそれなりに人が見受けられましたが土日になるとSUBWAY以外のお店が閉まり閑散としていました。

すぐ近くにはなかなか大きい動物園があり劇場がチケットを取ってツアーを催してくれました。

ドイツに行く前はショー当日まで2日あるのだから少しは観光できるだろうと考えていましたが時間的余裕はあっても体力的な余裕がなく、そんなこんなでコンペティションは幕を開け、ケベックとの気

温の差によって生じる諸々を乗り越え最終日、この日のオーディエンスは殆どがキャスティングに関する人達、そしてショー終了後その人達によって賞の有無が協議され、結果私はウィンターガーデンというベルリンの劇場での契約が保障されました。

実は、ステージの高さが十分でなく一階後ろに居た観客には私の動きがほとんど見えない状況だったため、たぶん無理だろうな、と半ば諦めていたので大変嬉しかったです。オーナーからは 2017 年頃になるだろうというお話で、まだまだ先ですが楽しみです。



それから、この日は沢入国際サーカス学校での先輩であった、ヨーヨーパフォーマーの直人さんとその奥さん、直人さんのエージェントがリュッセルドルフから、ポールダンサーであり大道芸でも活躍しているめりこさんが日本から観にいらして、受賞式後のパーティでは日本語が飛び交っていました。こんなに日本語を話したのは久しぶりでとても楽しい夜でした。

←空中リングを演じる目黒さん。©Norbi Whitney - Videographer / Photographer

翌日の朝、飛行機に乗ってモントリオールへ。そこからいつものようにオルレアンエクスプレスに乗ってケベックに到着。一息つく暇もなく洗濯し、また荷造りです。

学校卒業後、初めての契約に向かうためケベック空港へ。

そして、私は今 *Vague de Cirque* というケベックのトラディショナルサーカスで働いています(動物はいません)。私達はこれから 2~3 週間ごとに場所を変えてケベック州内を巡業する予定です。私にとって

の最初の巡業場所はニューファンドランドのサン・ジョーンズ空港から車で 3 時間走ったところにある海辺の町ブエナビスタ。夏なのに気温が 10 度前半、海も綺麗でパフィンというペンギンに似ている鳥が見られる避暑にもってこいの場所です。

町の入り口にあるカボットスタジアムというアイスホッケーのスタジアムの裏が今回の宿营地です。

関係者は皆キャンピングカーや小さな家のように作られたコンテナに寝泊りしています。シャワーやトイレ、インターネットはスタジアム内で行い、料理はそれぞれの家で作る事ができます。

到着後、アーティストや技術者、ディレクター、演出家などに挨拶し、その日は引越し、当面の食材の買出しで終わってしまいました。

サーカステントは小さく、内部の中央には円形のステージ、そこから一本道が通り、テントの裏につながっています。ステージと一本道はプラスチックの芝で覆われていて、ショーのコンセプトである バーベキュー BBQ を演出する一助となっています。一本道とテント裏の入り口の接続部分にはプラスチックの簡易小屋(今回のショーのクラウン BOB の家という設定です)が設けてありショーの道具が置けたり、出番待ちのアーティストが待機できるようになっています。

私は今までいたアーティストの穴埋めなので、先週 1 週間はショーの再構築に充てられました。ディレクターと演出家と一緒に考えるのですが、なかなか思うようには進みません。既存のクラウンの作品も演者が気に入っておらず変えたいと言い出し、これを書いている今日はショー初日前日ですが、いまだにショー全体を完璧に通した事はありません(昨日の夜、一応技なしの通しがあったのですが作品と作品の間の繋ぎ部分が上手くいかずそのたびに進行を止めていました)。

正直不安しかありませんが、一人で焦っても疲れるだけなので流れに任せようと思っています（これはケベックで学んだことのひとつです）。

ショー以外ではこの町で一番美味しいというフィッシュ&チップスのお店に食べに行ったり、スタジアムの名前にもなっているイギリスから初めてこの土地に降り立った人物カボット（イタリア人）の像がある陸地の先端部分に流水を見に行ったりして、ショーが完成してないのに随分のんびりだなあ、などと思いながら過ごしていました。

衣装がそろっていない、曲をもらっていない、ショーが完成していない…のないないづくしですが、きっと今夜、全ての埋め合わせが訪れるんだと思うと投げ出したい気分になりますが、学校を卒業してここにいられるのも私の周りの人々や両親、国際サーカス村協会のお力添えがあつてのことで、自分ひとりの力でここにいるわけではないのだと思えば、不思議と勝手に体は動くもので、これも皆様のおかげだと思っています。

この場をお借りして皆様に感謝の言葉を申し上げたいと思います。今まで本当にありがとうございました。私はこのように卒業後プロとして路を歩み始めました。皆様はどのようにお過ごしですか？

（目黒有沙）



（左）©Jacques Gaines （右）©Stefan Hoyer Photography

●モンゴルサーカス事情

2015年6月5日（金）～12日（金）、ウランバートルに滞在し、現在のモンゴルのサーカス事情をリサーチしてきました。

■これまでの経緯

元国立モンゴルサーカスは、社会主義時代にソ連の経済的、技術的な支援により生まれ、発展しました。優秀な指導者やパフォーマーが次々と生まれ、ラクダとともに行うアクロバットや狼の調教芸などモンゴルサーカスが唯一行っている演目も多く、コントーションやストロングマンなどの演目は世界中で高く評価されてきました。常設劇場がつくられて公演は毎日のように行われていましたが、1992年

の民主化以降、国からの管理が徐々にずさんになり、団員や指導者への給料、動物のエサ代、建物の修繕費や維持費など、あらゆる面で支払いが滞り始めました。パフォーマーや指導者はどんどん海外へ出ていき、動物はやせ細り、放置されたサーカス場は老朽化の一途を辿るほかありませんでした。

そんななか、サーカス内部の有志から「サーカスを民営化しよう」という動きが起こり始めます。自分たちでサーカスを国から買い取り、運営していこうではないか、かつての盛り上がりを取り戻そうではないかと心ある人々が立ち上がり、いざ民営化となったそのとき、巨大な敵が現れました。朝青龍です。

日本の相撲で莫大なお金を稼ぎ、モンゴルに会社を持ち、政界など多方面の権力者に知り合いがいる彼に、サーカス関係者たちは束になってもかなわず、金額で負けてしまいました（表向きには違う理由になっているはずです）。2007年1月、朝青龍のファミリーが経営する企業、ASA（アサ）グループがサーカスを買収し、このニュースは日本でも報じられました。ちなみにASAグループ側にサーカス関係者はいません。



↑かつてのサーカス劇場。2007年撮影。

なぜ朝青龍はサーカス場がほしかったのか。サーカスの常設劇場はウランバートルの中心部、東京でいうと銀座や赤坂といった一等地に、広大な敷地と大きな建物があるからだと個人的に推測しています。経済成長が続く（2014年経済成長率ランキングで世界6位、アジア1位）モンゴル、ウランバートル市で、こんなに広大な敷地はもはやなかなか手に入りません。つまり不動産として大変魅力的であるということです。

その後すぐにサーカス場の大規模修繕が行われ、劇場は見違えるほどキレイになり、照明などの設備も格段によくなりました。しかしそれは、サーカス芸術のためでなく、2008年8月に行われた大相撲モンゴル巡業のためだったようです。

ASAグループが買収に勝つと、元国立サーカス内にいたサーカス関係者のほとんどがサーカス場を出て行きました（追い出されました）。指導者たちは生徒たちを連れて、ホーチン・ツイルク（旧サーカス場）へ行ったり、市内のマンションやビルの一室を借りてスタジオを作ったりして、自分たちの練

習を続けました。

とても混乱した時期でした。たまたま私はこの時期にモンゴルサーカスでコントーション修業をしていたのですが、回りの指導者や経営者たちは、ASA と、ASA にサーカス場を渡した国に抗議や不満の声をあげながらも、この先どうすればよいのか急な判断と実行を求められ、パフォーマーや生徒たちはどこに身を置けば生きていけるかと焦り、とにかくお金のにおいがするところを探しては裏切ったり、裏切られたりということ、狭いモンゴルのさらに狭い世界の中でどろどろとやっていたと、今思い返してみると感じます。サーカスから出たサーカス関係者たちはそれぞれ個別に活動を始めました。サーカス用のテントを買って公演を行った団体もありますが、テントを建てての興行は大きな負担になるので、個々の団体レベルで頻繁には開催できませんでした。

民営化前も毎日のように公演は行われなくなりましたが、それでも6月1日の世界子どもの日、学校の秋休み、新年などに合わせてサーカス公演が劇場で行われていました。しかし今、劇場でのサーカス公演はほとんど行われなくなりました。貸小屋と化した劇場は、サーカスの公演を行うときも高いレンタル料を支払わなければいけません。ちなみに練習場を使うときも、です。今では歌謡ショーやボクシングの試合など、サーカスに関係ない催しがほとんどだとのことでした。

モンゴルで一番大きな国民的行事ナードム祭の時期や、夏の間（5月末～8月はじめ）の観光のハイシーズン時は、観光客向けのミニショーがウランバートル市内で行われ、コントーションやジャグリング、ハンドトゥハンド、マジックなどが観られるかもしれませんが、パフォーマーたち、とりわけ優秀な人はどんどん海外へ出ているので、レベルの高いパフォーマーのショーはほとんど観られません。

買収の際、国から ASA へ「モンゴルサーカス芸術発展のために運営していくこと」と、条件がいくつか提示され、朝青龍側はサインをしていますが、サーカス芸術発展のために彼らが働いたことは皆無に等しく、無関心であると言わざるをえません。

モンゴル国立サーカスが民営化して8年。もともとサーカス場にいた人たちの批判や抗議の声を蹴散らしながら堂々とビジネスを続けているというあまりにも傲慢な態度はあちこちから話を聞いてはいましたが、サーカス劇場が今どうなっているのか、もともといた人たちは何を思い、どうやって生きているのか、サーカス内にサーカス関係者はいなくなってしまったのか、動物たちはどこへ行ってしまったのか…。

まずはこちらをご覧ください。現在のサーカス劇場です。全体的に大きく、あちこちが変わりました。



「ツェンヘル・ブンブグル」（水色のまんまる屋根）と呼ばれて人々に親しまれてきた劇場の屋根は

黄色に塗り替えられました（白黒だとお伝えできないのが残念です）。サーカス劇場とつながる元国立サーカス学校の建物は銀行となっていました。動物がいたところは洗車場とコンピューター関連の会社が入っていました。以前は劇場内に一歩足を踏み入ると動物のにおいがして、おがくずの香りが漂っていたものですが、今は何の香りもしなくなっていました。

サーカス劇場外のひらけたスペースにはギッシリと車が並んでいました。銀行の駐車場、それに、車売り場になっていました。驚いたのは、サーカス劇場にボコンと、デキモノがくっついているような外装となっていたことです。バーなのだそうです。お酒を飲むバーです。とてもじゃないけれど芸術的な場所とはいえない、悪趣味な外観となってしまいました。なんじゃこりゃ。この腫れものはかなり重症ですよ…。このデキモノのせいで、角度によってはサーカス劇場が隠れてしまってほとんど見えません。

建設中の高層ビルの前で、忘れられて放置されているのか色あせたかつての看板が、今のサーカス事情を物語ってくれているようでした。

滞在中は連日、色々な立場のサーカス関係者等と会いました。その中で現在のサーカス事情について話を聞きたいと言ったり、劇場内を見学したいというと、数人から「危険だ」と言われました。危険とはどういう意味なのだろう。このときはよくわかりませんでした。

ある方が、ASA サーカスとこんなことがあったと話してくださいました。

「ASA サーカス場でショーをやるというので、あるカンパニーがジギドを出しました。そうしたらショーの後、朝青龍の家族のひとりが一頭の馬を指して、『この馬は素晴らしいわね。見たいから、近くまで連れてきてちょうだい』と言うので、その馬を連れていくと、なんと彼女は『いい馬ねえ。この馬、気に入ったわ。明日の朝、〇〇（地名）へ連れて行ってちょうだい』と言ったんですよ。その場にいた人たちが唖然としました。『この馬はサーカスの馬です。こうして舞台上でパフォーマーと演技できるようになるために、長い時間がかかりました。それを連れていくとはどういうことですか』とカンパニーの方が抗議しましたが、聞き入れられませんでしたよ。その馬は翌朝、彼女の指示どおり、どこかへ連れて行かれてしまってそれっきりとなりました」

いくらお金持ちで有名人で権力を持っているからといって、こんなにやりたい放題できるものなのでしょうか。

モンゴルのサーカス関係者や、関心のある人々が声をあげてこなかったわけではありません。集まり、批判し、抗議の声をあげてきた人たちはいました。新聞やTVなどでも意見を言ってきた人もいました。

昨年、日本でいうところの公正取引委員会の代表が、朝青龍はサーカス場を正しく運営していないと指摘。文書を送り、TV 番組などのメディアで朝青龍と直接議論を交わすなど連日派手にやり合ったそうです。

その結果、どうなったか。代表は辞職したのだそうです。なぜ辞職したのかについてはよくわからず、朝青龍に突っ込みすぎたことが原因だろうとささやかれているのだそうです。

朝青龍の実兄のひとりにはモンゴルの与党、人民党の議員です。

相撲界、経済界だけでなく政界も手中にあり、さらにいえば、もし裁判にかけることがあっても大金を賄賂することで司法も意のままなのだそうです。

モンゴル関係者たちが口をそろえて「危険」ということがようやく理解できました。

これまでは「暴れん坊」「困ったちゃん」という意識で、みんなが声をあげればサーカス劇場がサーカスの人たちの手に戻ってくると楽観的に考えていましたが、もっと闇は深く、そんな可能性はないのだとようやく気付きました。

モンゴルのサーカス関係者たちは元サーカス劇場をとっくに諦めて、もう関わりたくない、近寄りたくない、それよりも自分たちの活動をどんどんやっていくしかないと切り替えていました。

ACC が招聘し、何度も日本に来ているハドガーさんは長年の夢であったというサーカステントを買い、この春に初めての公演を行ったとのことでした。



←ハドガーさんのサーカステント。

ウランバートル市郊外で馬の調教芸を教えている人もいます。また、私がコントーションを習っていた先生のスタジオが 15 周年記念を迎え、ほかのいくつかの団体もパフォーマーを育て、ショーを行い、海外と契約を結んで派遣したりと自分たちの活動を行っていますが、モンゴルの新聞のひとつ「ウヌドゥル」紙の記者で、サーカスに関する記事をよく書いている方が『今のモンゴルサーカスの状況は、岩が砕かれて、小さな破片がバラバラと散らばっているようなもの。小さなかけらを投げたって、たいした威力ではない』と表現するように、残念ながらかつての盛り上がりを取り戻すことは、しばらくはなさそうです。

私は、鳩と行うモンゴルコントーションの作品をいつか観てみたいと思っていましたが、どうやらこの目で観ることはなさそうです。これはマネージュでの練習が必須なのだそうです。

私は、鳩と行うモンゴルコントーションの作品をいつか観てみたいと思っていましたが、どうやらこの目で観ることはなさそうです。これはマネージュでの練習が必須なのだそうです。

モンゴルのお家芸と言われるほど有名になったコントーションは、幸いマンションの一室ほどのスペースでも練習ができるので、これからもモンゴルブランドを保ち続けることと思いますが、大勢で行う芸や高さが必要な芸などある程度環境が必要な芸は、サーカス劇場で練習ができないためにどんどん減っていつているようです。

民営化後、大型芸の練習は旧サーカス場で行っていたのですが、私が帰国してからまもなくして入ってきたニュースに驚きました。なんと、この旧サーカス場が火事になり燃えてしまったというのです。



記事;ダシチョーリン寺の旧サーカス場(ホーチン・ツィールク)で昨夜 10 時ごろ火災が発生した。出火原因は定かではないが屋根から出火したとみられている。市の特別救助隊、消防隊が人員を増やして動員し、周りに駐車されていた車を遠くに移動させるよう運転手に要求し、サーカス場の 3 か所に消防車を配置し鎮火した。建物は老朽化し倒壊の危険性もあったと、集まった人たちが話していた。この場所で練習していたパフォーマーたちも来ており、「私たちに残された唯一のサーカスがなくなってしまった。これからどうしよう」と言い、涙を流している者もいた。

(←旧サーカス場の火事を報じるニュース 2015年6月24日 インターネット新聞「Mongol News.mn」より <http://mongolnews.mn/1lxn>)



↑燃えてしまったホーチン・ツィールク。モンゴルサーカス関係者が提供。↑燃える直前。2015年6月長屋撮影。

これで、民営化後に唯一残されたサーカスの建物がモンゴルからなくなってしまいました。

老朽化してボロボロだったとはいえ、この場所はモンゴルのサーカス関係者たちの、心の故郷のような場所でした。その悲しみを思うと心中察するに余りありますし、ここで練習していた若者たちはどこで練習すればよいのでしょうか。このような危機的な事態であっても ASA 側が練習場や劇場を提供することはないでしょう。

なんと表現すればよいのか…残念でならないのですが、ゾウはありんこなんて簡単に踏みつぶせるので、今回は正直にレポートしましたが、ソトモノの私はモンゴルサーカスとの今後の関わり方を考えていかなければいけないなあと危機感を感じた旅となりました。(長屋あゆみ)



←オトゴ先生スタジオ。

コントーションをメインに、フラフープや空中ティシュー、ハンドバランス、アクロバットなどのサーカス芸を教えている。5歳から16歳ほどまで40名ほどが通っている。

☆ご寄贈のお願い

モンゴルでサーカスを学ぶ子どもたちと沢入国際サーカス学校に、ジャグリング道具はじめサーカス、大道芸などで使える道具を寄贈していただければ大変ありがたく思います。

ご寄贈いただける方は、あらかじめ当協会までご連絡くださいますようお願いいたします。

担当；東京事務局 長屋 Tel；03-3403-0561 メール；a-nagaya@accircus.com

●ジャグリング・ボールの行方②

前々回の会報に“ジャグリング・ボールの行方”というとりとめもない文章を書いたところ、蹴鞠の神がおりにくる話に関心を持たれた方から問い合わせがあった。いま、ここで書こうと思っているのはその神様の話ではなく、実は今もどこかを転がっているボールの話でもない。

しかし、どこかを転がっているボールが会うかもしれない、ひとつの風景である。

『さらば、愛しき鉤爪』（エリック・ガルシア著）という、奇想天外な推理小説がある。なにが奇想天外かというと、人間に化けるスーツを着て生きている、二億年前の恐竜と人間が現在に共存している物語、しかも殺人事件を扱った推理小説なのだから。

で、そのなかのとりとめもない文章が以下の通り。

「～、公園内にもういちど目を配った。とくに変化はなさそうだ。歩行者たちは行きかい、子どもたちは駆けまわり、ジャグラーたちはクラブを落としている」（P207）

物語にまったく関係ないが、僕の目は、この“ジャグラーたちはクラブを落としている”という文章に釘付けになった。それは、今では日本の公園でも見かけることのできるありふれた光景だ。

だが、こうして文章に書かれると、なにか別なことが伝わってくるような気がするのである。

ジャグラーやジャグリングのファンであれば、クラブを落としているジャグラーにはまず興味がわかないし、サーカスやジャグリングについて何か書くのであれば、超人的な技を見たとか、あるいは危険な技に失敗して命を落としたことなど、当然、人々の関心を引くことを書くことになる。

クラブを落としているジャグラーなんて絵にもならないだろう。

だが、待てよと僕は思う。ぼろぼろとクラブを落としたりボールを落としたりしているジャグラーが、もしもその落とすことを練習していたら、その人は何をしようとしているのだろうか、僕は考えてしまうのだ。ひょっとすると、そこにもうひとつのジャグリングやサーカスの世界が隠れているのではないかと思ったりするのである。

ここで、クラウンの仕草、動きをイメージしたりする人もいるにちがいない。僕も当然イメージする。

だが、さらにその向こうというか、そのようなクラウンの技にも収斂していかない、失敗の繰り返しによる、いわば裏側の世界。そこを旅することはできないのかなと思ってみたりするのだ。

失敗を繰り返す。そしてうまくならない。3本のクラブが空中に舞って、それを受けようとするジャグラーの手に帰ってこない、一秒にも満たない時間。そこに、拾われず、転がり続けるジャグリング・ボールが、転がってきたら何かが起こるのだろうか。何かが起こるまで、僕は待ち続けなければならないのかもしれない。描かれることのない、ジャグリング、サーカスの世界のために。（西田敬一）

最新サーカス公演情報

★木下大サーカス

- 京都公演 公演期間 2015年7月18日(土)～2015年9月23日(水・祝)
- 休演日；毎週木曜日と8/12(水)、9/16(水)。但し8/13(木)は開演。
- 会場；JRA 京都競馬場 特設会場 ●電話；京都公演事務局 Tel.075-632-7200

★ポップサーカス

- 郡山公演 公演期間 2015年7月4日(土)～2015年8月23日(日)
- 休演日；毎週水曜日 ●会場；ショッピングモールフェスタ大テント
- 電話；郡山公演事務局 Tel.024-926-0045

★ウルトラドリームサーカス

今年のルスツリゾート恒例ウルトラドリームサーカスは、ロシア・ベラルーシ・カザフスタン・チェコ・ウクライナから集結したまさにワールドクラスなサーカスにグレードアップ！※入館料のみでご覧いただけます。

- 公演期間 2015年7月24日(金)～2015年8月23日(日)
- 公演時間 ◎通常公演 11:00/15:30 ◎ナイター祭り(8/13-15) 15:30/19:30(各回50分)
- 休演日；毎週月曜日 ●会場；ルスツリゾート サーカステント ●電話；0136-46-3111

★2015 国立ポリショイサーカス

●横浜公演 2015年7月29日(水)～2015年8月5日(水)
ポリショイサーカス公演本部 Tel.03-3234-7807

●幕張公演 2015年8月8日(土)～11日(火)
ポリショイサーカス公演本部 Tel.03-3234-7807

●福岡公演 2015年21月(金)～24日(月)
ポリショイサーカス福岡公演事務局
Tel.092-752-1710

●大阪公演 2015年21月(金)～24日(月)

●名古屋公演 2015年27月(木)～31日(月) 東
海ラジオ放送事業部内 ポリショイサーカス事務局
Tel.052-962-6151

チケット代や公演時間が異なります。詳しくはウェブサイトなどをご確認ください。
公式サイト <http://www.bolshoircircus.com/>

その他公演情報

★空転劇場 Vol.3

伝統の劇場、浅草東洋館を舞台に小林智裕プロデュースで送る隔月開催のジャグリングオムニバスライブ。

☆沢入国際サーカス学校の吉川健斗が出演します！

- 日時；2015年8月5日(水) 19:00 開演
- チケット；前売 2,000円 当日 2,500円 ●会場；浅草東洋館(つくばエクスプレス浅草駅徒歩すぐ)
- お問い合わせ；小林 kuutentheater@gmail.com 050-5585-3684